

---

# 白い空間のその中で

イラル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白い空間のその中で

### 【Nコード】

N3644F

### 【作者名】

イラル

### 【あらすじ】

病院の看護婦であるケシは、一つの悩みがあった。それは、同じ病院に勤める一人の医師に、毎回呼び出されることだ。彼の仕事は毎回変なものばかり。今回だっけきつと…。

いつも通りの朝がきた。

白い壁が見るとこ見るとこ視界を遮る。

白と言っても多少灰色がかっていて汚れてはいるけれど。

おはようございます。という挨拶が行き交い、頭を下げたり、顔をのぞき込んだりしている様がちらほらと視界に入った。

またか。そう思ったのは、視界に入った私への伝言の紙きれ。

『待つ。』それだけ書かれた紙が黒板の私の名札の上に張られていた。

これは出席札だと言うのに。なぜあの人はわからないのだろうか。私はその紙をむしり取って丸め、ゴミ箱へと放り込んだ。

きつとまた厄介ごとだ。この先生の患者はいつも尋常ではないのだから。

それでも私は一つの白い扉の前で立ち止まっていた。

何も無視をしなくても、嫌だと言えがいいのだ。

だから私はノックをする。

返事はない。

いないはずはないのだが……。

しかたなしにドアノブに手をかけた。

昼間っから病室のドアに鍵なんてかかっているわけがなく、すんなり扉は私を受け入れた。

視界には白いきちんと整えられたベットが左右に三つずつ。計六個設置されていた。

白い布が揺れる。どうやら窓が開いているらしい。

人の気配はまったくもってしないのが不気味だったが、私は中に入り扉を後ろで閉めた。

「……人を呼び出しといていないんですかね。あの先生は。」

私はため息をつくとまっすぐ窓まで歩いていく。

ひらひらと舞う白い布が気になったのだ。

白い布の動きを片手で止め白い以外の色がついた世界を見た。

「きゃっ！」

いきなり黒い陰が私の視界を遮り思わず身を引いた。

その時、反射的に目を閉じていた。

目を開けた時には鮮やかな世界が静かにたたずんでいるだけ。

風が私の頬を撫ぜ世界を揺らす。

さっきのは気のせい？

窓から身を乗り出して外を見てみるけれど特に変わった様子はない。

小鳥かな……ここ九階だしね。

ガタッ

後ろからいきなり物音がして、私はびくっと身を強ばらせた。

「おはよう。ケシ」

聞き覚えのある声にほっとしたのも束の間、

次の彼の発言で背中に冷たいものが走り、冷や汗が吹き出した。

「カンさんも元気そうですね。」

ぱつと後ろを振り向くと黒髪の見慣れた先生が扉に一番近いベットのところに立っている。

ベットにさつきは誰もいなかったはずなのに。

私は思わず生唾を飲み込み喉を鳴らした。

ベットには茶色い髪のごく普通な男が寝ながら先生と話している。いったいどういうことなのか？

私が彼を見過ごしていたとでもいうのか？

「ケシ。こちらが今回の患者さんだよ。ときおり記憶がないそうだね。」

人格障害をおこしてるんじゃないかって。」

先生は笑顔で私に説明してから患者さんに私を説明した。

私は軽く患者さんに会釈をし微笑んでみせる。

気味が悪いがあくまで患者さんだ。

患者さんの前で嫌そうな顔や辛そうな顔はできない。

それに患者さんが寝てたから私もきつと気づかなかったんだわ。

「先生っ。ちよっとお話がっ。」

笑顔で先生の襟首をひっつかみ室外へ連れ出した。

「どうかした？ケシ。」

あっけらかんとした顔でいる先生。

その顔に少し私は苛つきを覚えた。

「先生。私、もうやりませんからね。」

きっぱりと言い放つが先生の顔はにこにこしたまま変わらない。またしてもその顔に私は苛つきを覚えた。

「ねえ、ケシ。君は俺にそんなこと言えたんだ？」

いきなり先生の目が鋭く私を突き刺した。

背中にひんやり冷たいものが走り汗が吹き出してくる。

そして、しばらくその問いかけが頭の中を何度も駆け巡る。

「……私は、他の人に頼んでくださいって言ってるんです。私だって他に仕事があるんですからっ。」

たまらず私は先生から視線を外す。

それでも彼の視線はとても痛かった。

「……やだなあ。ケシだって知ってるだろ？俺がなんなのか。」

声は笑っていた。けれどその内容は私をおびえさせるのに十分だった。

ぞくりと鳥肌が立つのがわかる。

私に選択の余地はない。

「……早く別の方探してくださいよね。私は今度でもう降りますから。」

「ああ、うん。見つかったらね。はい、資料。」

「そうやって探もしないんですよね。」

今回はどうしてあの部屋を病室にしたんです？」

腕に資料がぽんと触れたので私は受け取りながら先生に聞いた。

先生の顔がまだ見れなくて資料を凝視する。

またあのへらへらした笑みをしてそうで。

人を脅した直後にそんな顔をするのを見たくもなかった。

「そういう君もなんだかんと言って毎回俺のここに来るよね。断れないって知りながら。」

病室は俺の部屋を新たに貰ったから俺の患者用にしただけ。面食らった顔してないで最初の仕事。」

私は先生の台詞にびっくりして思わず顔をあげ先生の顔を凝視していた。

そんな私に先生は資料と紙一枚を押しつけると病室へと姿を消して行った。

後に残ったのは口をぽかんと開け状況についていけない私だけだった。

どうして私は止めたいはずなのにあの先生の台詞にどきつとなったのかしら。

私は本当は止めたくないの？

そりゃあ患者さんの役には立ちたいけれどもあの先生の患者さんは……。

じゃあ、なんで？

……先生の役に立ちたい？

「……やめやめっ。あんな先生の役に立つても患者さんは救えないわ。」

よし、決めた。私が患者さんを助けよう！」

そうときまれば話が早いわ。さっさとこの人に会ってしまおう。

紙に張られている顔写真をちらりと身、ホールへと急いだ。

紙には写真とホールで待っているとしか書かれていない。

あの先生は本当に字を書くのもおっくうなのね。

ぶつぶつと先生の文句を言っていたら後ろから肩を叩かれた。

「あ、は、はい。何か？」

少しもつてしまったが、平静を装うように笑顔で振り向いた。振り向いた先には、先生から貰った写真に移っていた顔があった。写真よりは少々頬がこけ、やつれ気味ではあるが彼女は間違いなく写真の人物だった。

肩まで伸ばした黒髪。多少刻まれている皺からみて、40代後半くらいの女性だろう。

この人があの患者さんに関係のある人なのだろうか……。

「あの……よろしく願いします。」

私と目が合うと、彼女はいきなり深くお辞儀をした。

私はびっくりして慌ててこちらこそ。と同じようにお辞儀をした。それから彼女と椅子に腰をかけた。

「私はケシと言います。黒那先生くろなの患者さんのお話ですよね？」

とりあえず、話を聞かないことにはどうにもならない。

だって、私はまったく何も先生から聞かされていないのだから。彼女は小さくコクリと頷いた。

「あの……お名前はお伺いしません。けれど、今回の内容について、私。

何も先生から聞いてないんです。よろしければ、何故貴方が。

いえ、患者さんが黒那先生の元に居るのか教えていただけませんか？」



言葉を選びつつ、丁寧に聞く。先生の患者さんだ。わけありに決まってる。決して名前や素性を聞いてはいけない。それがあの先生の患者さん関係のルールなのだ。私の呼び名だって、先生の呼び名だって本当はまったく別のもの。だから、先生の患者さんに会う時は、胸の名前が入ったプレートは外している。

「はい。私も患者さんと言われている人がなぜ先生のところに居るのかは知りません。

ただ、ただ先生は……。」

そこで彼女は大きく息を吸った。カタカタと握っている手が震えだす。

それを落ち着かせるように彼女は眼を硬く閉じた。

私はもう一度彼女の口が開くのを待った。

しばらくして、彼女はゆっくりと目を開け、言葉を紡ぐ。

「私の子供を……子供の行方を知っていると。

あの男が関わっているのだと。そう……おっしゃったのです。」

だんだんと言葉に力が入ってくるのがわかった。

私は、ただ『そうですか。』と相槌だけを彼女に打った。そして考えていた。

子供。最近何か事件があっただろうか？しかも、新聞の隅の方の小さな事件。

そんな事件に先生はいつも関係している。

けれど……わからない。

仕方が無い。ここはこの女の人に聞いてみよう。

答えてくれないかもしれないけど。

「あの……。」

「ケシ。」

彼女に問いかけようとした時、私の名をあの人が呼んだ

。一気に喉が詰まりカラカラになる。背中はずっと寒くなった。

軟らかい声だが、明らかに深入りしそうになった私を、先生はたしなめている。

そう感じた。ゆっくりとしか動かない首を、やっと先生の方へと向けた。

相変わらずの笑顔だ。

「な、なんででしょうか？先生。」

「その人をあの病室まで連れてきてくれないか？全て、わかったんだ。」

満面の笑みで言う先生。何か発見した子供のようにとっても嬉しそうな顔。

それゆえに私の怒りは一気に上昇した。

「はい。わかりました。」

やたらぶつきらぼうに、先生にぶつけるような口調で返事をした。

思いっきり蚊帳の外。

人を呼びつけておいて、彼女を病室に案内させるだけの役！？冗談じゃない。

私は先生の召使いでもなんでもないのよっ！？って叫びたかったけど、ここは病院内。

しかも、人が大勢いるホールである。

私はこの気持ちをぐつと抑えた。絶対後で全部ぶちまけてやるんだからっ！

とりあえず、彼女の前を歩き、先ほどの部屋へと案内する。

先生は準備があるから。と、さっさとどっかへ行ってしまった。

部屋まで来ると、私は今朝の出来事を思い出して胃がムカムカとしてきていた。

また変なことが起こらないだろうか？

アレは本当に気のせいだったの？

疑問が駆け巡って、しばらく扉の前に立ち尽くしてしまった。

彼女が不思議そうに私を見る視線で私は覚悟を決め、ドアを叩いた。

「失礼します。」

ドアを開けてからお辞儀をした。そして、おそろおそろ顔をあげ室内を見回す。

……いない……。

ベットには誰も居ない。

見間違いなんかじゃないつ。私は何故かとつさに窓に駆け寄った。

またカーテンがひらひらと舞っていたのだ。心臓がドクンドクンと波打って。

今朝の光景とは違うが、太陽に照らし出された色が目に入る。

耳には心臓の音だけが響く。目を閉じないようにと見開いて。

私は外を凝視した。

「看護婦さん……？」

彼女が私を呼ぶ。けれど、私は微動だにせずに外を眺めている。

……何も、起こらない……？

いまかいまかと待ち構えている気持ちがだんだんと静まってくる。

そんな、朝と同じようなこと起こるわけ無いじゃない。

きつとアレは気のせいなのよ。

そう言い聞かせても、なかなか身体は動こうとしない。

「ケシ。何をしてるんだ？」

声に驚いて、ばつと後ろを振り返った。

額からは汗が噴出している。

気持ちが悪い。心臓がバクバクと言っている。

私を呼んだのはもちろんあの先生。

「……………か、患者さんは……………？」

もう、焦っていることを隠すことなんかできなかった。

完全にどもってしまふ。声が上擦ってしまふ。

「ああ、ここ。」

そう言つて、彼はベットを指差した。今朝と同じ、扉に一番近いベット。

いなかったのに……………絶対にいなかったのにっ。

そのベットには今朝の男が、静かに眠っていた。

身体が震えるのを必死に堪えた。黙っていよう。じゃなければ私はきつと……………。

「先生……………この人が息子と関係があるんです……………ね？」

彼女が先生に近寄つておそるおそる尋ねている。

なんでこの人は不思議に思わないんだろうか？それともまた私の見間違い……………？

「ええ、そうですよ。つかのとお伺いしますが、貴方は狼人間というものをご存知ですか？」

「え？」

さらさらと言葉を紡ぐ先生に、彼女は目を丸くして聞き返した。そりゃあそうでしょう。誰が今の時代、狼人間なんて信じるものか。

「狼人間は、満月の夜に獰猛な野獣に変化する血をもったものと一般には言われています。けれど、狼人間にもいろいろな種類がいるんですよ。」

彼は、黄色を見ると変化してしまうとても危険な種類なんです。先ほども、変化して出て行ったみたいですが。ほら、口元と手をご覧ください。」

先生は彼女が口を挟めないくらいつらつらと言葉を並べていく。私も彼女も、先生の言葉通りに彼を見た。

「ひつ。」

彼女が小さく悲鳴をあげる。私も一歩後ずさり、壁に背中をぶつけた。

血が、彼の手と口には、ありありと血痕がついていたのだ。飛び散ったように頬にも数箇所赤い斑点がついている。

流石にこれにはびっくりするなという方が無理だ。そして、先生は続ける。

「どうやら食事をしてきたようです。」

動きが素早いので僕が戻ってくる前にベットに戻ったようなんですけど。

近づかないほうがよろしいですよ？」

彼女は、ベットにいるソレをもっと近くで見ようと歩み寄っていた。それを先生は言葉だけで軽く止めるだけ。

ああ、いつものことだな。とそう思って、胃がぎゅっと締め付けられた。

「さて、それでは本題に入りましょうか。

貴方のお子さんは、行方不明になったのち玄関に無残な姿になって戻ってきていた。

それでよろしいですね？」

「……はい。」

「そして、お子さんは黄色い鞆をしょっていた。違いますか？」

「はい……そうです。黄色いランドセルを……買って上げました。」

彼女の目から次々に涙が溢れてくる。

目はキッとベットにいるソレを憎々しげに睨みつけたまま。

「その鞆は、コレですか？」

先生は、ベットの下から、真っ赤なランドセルを取り出した。

黄色いランドセルではない……とところどころから黄色が覗いているが。

「っ……。」

私はそのランドセルから視線を外した。わかってしまったのだ。

何故その黄色いはずのランドセルが真っ赤なのかを。

血だ。

血で真っ赤になってしまっているのだ。もう、吐き気が込み上げてくる。

必死に喉元を押さえて、私はちらりと彼らを見た。

赤いランドセルを抱きしめておいおいと泣き崩れる彼女と、それを見る先生。

こんな光景。見たくなんかない。そう思っても、身体が言うことを聞かない。

「あまりにお腹が空いた彼は貴方のお子さんを引きちぎり食べたのです。」

そう先生は彼女に告げた。

患者さんの手と口についていた血。黄色いランドセルが赤くなっていた事実。

信じるには十分すぎるほどの証拠。ふと、ベットのソレに目をやった。

「っ！！先生！！！」

私は思わず叫んだ。

いない。

ソレが居なかったのだ。

いつの間にか消えたソレに私はまたもやぞつと背筋が凍った。

「おやおや。また脱走ですか。」

先生は笑顔のままベットを見た。たったそれだけの言葉。まるでいつものことだと言わんばかりの態度だ。

「まあ、それじゃあ。捕まえてきましようかね。ケシ。悪いのだけど、君も探してくれるかな？」

「……わかりました。」

理不尽だと思っただけど、先生にそう言われて私はやっとほっとした。この場から離れられる。

私は返事をし、一礼をすると、彼女も先生も視界に入れないようにしてその場を去った。

吐きたかった。今朝の見間違いでもなんでもなく、彼を見たのだ。そう思いなおすと、妙に気持ちが悪い。

彼は狼人間で人を襲うのだ。先生ならきつところ言う。

『世間にバレル前に始末するべきだ。』絶対にそう言う。先生の患者さんはいつもソレ関係で。”始末”するところを見たことだつてある。

私は蹲った。思い出して、気が遠のきそうになったのだ。

「ケシ。もう終わったけど。これるか？」

しばらく荒く呼吸をしていると、目の前に足が見えた。そして、あの声。

相変わらずやるのが早い人だ。

……先生だって、彼と同類なくせして。



どうして……

そうやって捕まえてくるのだろうか？

” 始末 ” できるんだろう？

問いかけられたことに答えずにただ非情な先生の顔を虚ろな目で見ていた。

いつまでだって若い先生。緑色の目がキラリと光る。

「 ケシ …… ？ 」

「 行きます …… 」。 」

不思議そうに私を見る目がうそ臭くて、私は目を逸らしてそう伝えた。

それから立ち上がる。

先生も私も何も言わずにさっきの病室へと足を運んだ。病室には、今度はカーテンの仕切りが設けられていた。手前のカーテンの裏に寝袋がちらりと顔を出している。厚さから何かが包まれている。

先生がそれに近寄って、カーテンを開けた。

顔が見えない。

何故か顔が見えなかった。

ただ、直感的にアレなのだと。そう感じて唾を呑み込んだ。ごくんと喉が鳴る。

先生が、カーテンの後ろに居た女の人。

赤いランドセルを持っている彼女に試験管を渡す。

試験管の中身は透明で、でも泡がぶくぶくと出ていることからして水ではない。

先生は”始末”させようとしているのだ。彼女に。

「貴方が、やらなくてもいいんですよ？」

先生は彼女にそう言う。

でも私は知っている。

先生はもう、彼女に後戻りなんてできないような言葉をたくさん投げかけたに違いない。

彼女はそれを受け取ると、小さく首を横に振った。

そして、血走った目で寝袋を見ると、そのまま試験管を近づけた。

試験管の中身がゆっくりと無くなって行く。

カーテンから覗く彼女の鋭くなった血走った目。

黒い瞳が、怖いくらいに燃え上がっていて。

彼女の目から憎しみの炎が消えることなんかないんだ。と。

ただ、呆然とその行為を見ていた。

試験管が空になった。

途端に私は振り向いてドアを開け、外に飛び出た。

出た場所には、配膳台にのっている出来立てのドリアが置いてあった。

あつあつのドリアがふつふつとなっている。

けれど、試験が空になったとき、私の頭の中も空っぽになってしまったのだ。

真っ白で何も考えられはしない。

『ケシ。君は決して逃げられないんだよ。』

壁越しに、先生がそう言った。

そう。逃げられやしない。

血を見て欲情しちゃうなんて。私もまだまだ先生達と同類なのよ。

赤いトマト……血みたいで美味しそう。

私は逃げられやしない。

彼と同類な限り。

私は血という鎖に縛られて。

また同じような朝が来る。

完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3644f/>

---

白い空間のその中で

2010年10月12日05時33分発行